



子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2011年3月 NO.160



【もくじ】

- 2~5 「100店舗100業態」達成、そして「高知LOVE」…松村厚久
- 6~7 第6回美術作品コンクールの審査にあたって…植松由佳
- 8~9 イルカと遊べる、室戸ドルフィンセンター…河上倫子
- 10~11 縁の雫(えにし)のしずく…岡崎健児
- 12 言葉の現場から26「古池や…」のなぞを読み解く…広井護
- 13 高知市文化振興事業団12月の事業から
- 14~15 風俗歳時記・風伯

(財)高知市文化振興事業団

表紙デザイン:「誘う春」藤原愛



松村 厚久

私は今現在、東京でダイヤモンドダイニングとその他四社のグループ企業を営んでおります。会社の規模ですが、社員約五〇〇名、アルバイト約二五〇〇名の合計約三〇〇〇名が働いており、店舗数約一七〇店舗、売上約一七〇億円の大阪証券取引所のジャスダック市場に上場している外食企業です。創業以来、会社の一番のミッションであった「100店舗100業態」を昨年二〇一〇年一〇月下旬に達成しました。

思い起こせば、二十七歳の時に結婚して、独立を決心しました。そして、独立しようとして会社を退職しましたが、思った以上に、世の中は厳しかったのです。何が厳しかったかといいますと、僕は以前、デイスコの店長として大繁盛店を作った実績を銀行に説明すれば、お金が簡単に借りられると思っていました。企画書を持って意気揚々と銀行に行きましたが、銀行では全く相手にされませんでした。対応してくれた銀行員は、私の話を聞こうともしないまま、まして企画書さえ開いてくれませんでした。二言目には「お客さん、担保はありますか？連帯保証人はいますか？」と形式的な話ばかりでした。他のどの銀行へ行っても同じでした。今はもちろん担保や信用がないと銀行からお金を借りられないことも十分理解しておりますが、当時の私にはまったく分かりませんでした。何だろう、

この世界は。私はこれだけのイベント・企画を打って、これだけ大繁盛店を作ったのに、何故お金が借りられないのか、簡単に借りられるだろうと、安易に考えておりました。しかしながら、世の中、非常に厳しいものでした。結果として、お金は一円も借りられませんでした。これが現実でした。

銀行では、徹夜して作った企画書さえも開いてくれません。夢も語らせてくれません。情熱も語らせてくれません。口を開けば担保や保証人の話ばかり、その繰り返しでした。このままでは独立できない。無職になってしまう。何とかしなければいけない。ということ、親族にお願いして少しお金を借りました。でもそのお金は飲食店ができるほどの金額ではありませんでした。

そこで考えたのが、日焼けサロンでした。恥ずかしながら当時の私は、日焼けをしている方が女の子にもてるだろうということ



で、日焼けサロンに通っていました。そんなある日、渋谷の日焼けサロンに行きましたら、その従業員はいさつひとつもできず、何をしゃべっているかも全然分らない非常に店としてのマナーの悪いものでした。何だろうこの世界は？とても態度が悪い、でもちよつと待てと、こんなに態度が悪い業界、普通に清潔で、従業員もしっかりと対応をすれば私でも簡単に人気店を作ることができないかと思ひ、日焼けサロンを開業する決心を固め、オープンしました。結果的に、日焼けサロンは大ヒットしました。オープン翌年に「ガングロブーム」という肌をとても焼いているのが流行する波が来て、その波に乗って更に大ヒット。その後、日焼けサロン店舗を拡大し、都内四ヶ所にオープンしました。もうそろそろ銀行にもお金を借りられるだろうと思ひ、夢であった飲食店の出店準備に動き出しました。

飲食店一号店ですが、とにかく東京の中心地である銀座に出店したかったので、物件探しを始めましたが、次のハードルがありました。何かと言うと、銀座は敷居が高く、物件を借りようとしても「この若造が」「お前が飲食店をやるのか」と色んなビルオーナーに言われてしまい、なかなか物件の賃貸を認めてもらえませんでした。でも、私は一号店の出店は絶対銀座だと決めてお

りました。なぜならば、マクドナルド、スターバックス、タリーズなど、その後のブランド戦略が描きやすいということから、全て一号店は銀座だったのです。

銀座へ一号店を出店するという意思はありましたが、何回も何回もビルオーナーに断られる中、銀座の敷居の高さに心が折れそうになりました。なんとか夢だけで、意思を繋いでおりました。

そんな逆風の中、二〇〇一年、「ヴァンパイアカフェ」をダイヤモンドダイニングの一号店として銀座に出店しました。苦労の末、なんとか成功を収め、その年の年末に、店長、料理長、私と、数名の幹部社員を集めて宴会をしました。その時にみんな「五年以内に三店舗にしよう。そして会社を組織にしよう」と誓い合いました。もし、その二〇〇一年の宴会場にタイムマシーンがおりてきて、「今から、このタイムマシーンに乗って、五年後の世界へワープしましょう。ダイヤモンドダイニングは三店舗のお店を営んでいます」と言われたら、当時自分の可能性を信じていなかった私は、間違いなくそのタイムマシーンに乗って、三店舗のお店を持つていたことでしょう。しかしながら、結果的に一店舗目の出店から五年後、ダイヤモンドダイニングが実際に経営するお店は五〇店舗にもなっており、また。二〇〇一年の私は、三店舗、いや、

二店舗の出店も全く目処がたっておりませんでした。夢のまた夢でした。しかし従業員と「五年後には三店舗にしよう」と言い続けました。要するに、人間の可能性は無限大ということです。いつも限界を決めたり、諦めているのは弱い自分自身です。その時の弱い自分は三店舗で諦めようとしていました。しかし、実際は社員、従業員、アルバイトの方々の頑張りや、応援してくださる取引業者の皆様や周りの方々のご支援とご指導で五〇店舗にすることができました。人間諦めてはいけない、限界を決めてはいけない、やりきるしかない。やりきったら次が繋がると、この時強く感じました。私が天職としている飲食業ですが、まず飲食業は本当に素晴らしい職業です。簡単に説明しますと、今現在はデジタルの世の中です。誰もがコミュニケーションのツールとしてメール、ネット、携帯電話を多用しております。私の高校時代には、携帯電話はありませんでした。パソコンも基本的には使用しておりませんでした。例えば、好きな彼女ができて自宅に電話をするのに彼女の父親が出たらどうしようとか、ドキドキしながら電話をしたものです。電話の前で何回も練習して、ダイヤルをかけながら何度も止めたりしながら、勇気をもって電話をしたものです。今、考えると非常に大変な作業でした。また待ち合わせをす

る時も、例えば東京渋谷に「ハチ公」という犬の銅像があるのですが、「十八時ちょうどにハチ公の銅像尻尾のところまで」とまで、詳しく待ち合わせ場所を指定しないと会えない可能性があります。

今は余裕です。「十八時くらいに渋谷で」のような感じで軽い約束メールをしておいて、着いたら携帯電話に電話をすればいい。それくらいデジタル化しております。当時は待ち合わせも命がけでした。このデジタル世界の今だからこそ、飲食業は非常に大事です。生活に於いて、最後のアナログ・コミュニケーションの場です。部下を慰めるとき、彼女を口説くとき、新年会や忘年会でみんなが集まるコミュニケーションの場、それが飲食店です。

そして昨今、美味しい物を食べるにはわざわざ外食し、レストランで食べる必要はなくなりしました。なぜならば、美味しいものは今どこにも沢山あります。家庭のお母さんの料理も美味しい。コンビニの弁当やスイーツも美味しい。デパートの地下のお惣菜屋も美味しい。わざわざ外食をする必要は全くありません。だけど、皆さんコミュニケーションが取りたくて外食をしています。

そして今、二時間座っていられる業種というのにはなくなりしました。映画の上映時間もどんどん短くなっており、二時間を

超える映画は少なくなりました。ライブ、コンサートも観客は直ぐに立ち上がります。そう考えると、二時間座っていられるのは飲食業ぐらいです。

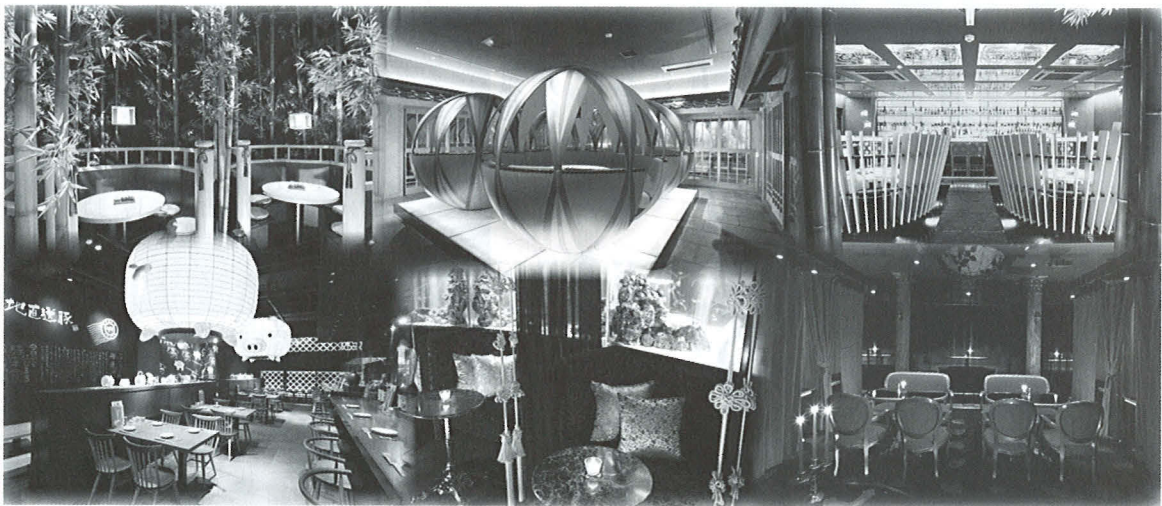
飲食業は本当に素晴らしい仕事です。最後のアナログの場で、人対人のコミュニケーションの場です。私は、この飲食業の素晴らしさを何とか一人でも多くの方に伝えたいと思っております。だからこそ、この飲食業でリーディングカンパニーになりたいと真剣に思っております。しかしながら、飲食業も大変なことは沢山あります。いや大変なことだらけです。良かれと思ってお客様にサービスをして、怒られることもあります。従業員に愚痴を言われることもあります。上司に怒られることもあります。本当に大変な仕事だと思えます。だけど、「お客様の喜ぶ笑顔が見たい」という想いだけで、みんなが頑張っている本当に素晴らしい世界です。

飲食の「食」という字は人を良くすると書きます。人と人のふれあいが一番大事だと思っております。今は携帯電話も、メールもネットも流行っておりますが、人間最後は対人、対人です。これがある限り、飲食店の役割は永久に続くはずなんです。

ところで、私の故郷は、高知県です。姉夫婦・両親ともに、現在も高知県に住んでおります。私は、高校卒業まで高知県で育つ

たので、故郷への思いが強いです。しかし当時、高知県から大学で千葉県に行ったときは、高知県出身ということが凄く嫌でした。訛りもある、方言もある。田舎者に思われるのではないかと理由でした。しかし、今では自分が土佐出身であることが非常に嬉しいです。だからこそ高知県への思いは非常に強いです。高知県には大変いい食材、美味しい食べ物が沢山あります。素晴らしい自然も沢山あります。しかし、それが東京の方々にはあまり伝わっていないのが現状です。だからこそ、微力ですが一〇種類の土佐郷土料理店を創るといふコンセプトのもと、「土佐十景」として現在土佐業態のお店を一〇店舗、それ以外にも数店舗の土佐郷土料理店を経営しております。その土佐郷土料理店にご来店頂いた東京の方が、食材でも観光でも何かしたら、少しでも高知に興味を持ってくださったらと考えております。微力ですが私を育ててくれた高知県と東京都の橋渡しの役に立てれば本望です。すべては、「高知LOVE」です。

中長期目標であった「100店舗100業態」を達成した今、私・松村厚久、そしてダイヤモンドディングは新たな目標として外食業界のリーディングカンパニーとなるべく、売上一〇〇億円企業を目指します。



まつむら あつひさ

一九六七年 高知市生まれ

追手前高校卒業後、日本大学理工学部へ。在籍中に、サイゼリアで四年間アルバイトし、飲食業の面白さを体験。卒業後、日拓エンタープライズ(株)で、ディスコの企画・運営に携わりエンターテイメントに目覚める。一九九六年、資金集めのためにA&Yビュティライザーを設立し、都内に日焼けサロンを展開。二〇〇一年、銀座に第一号店となる「VAMPPIRE CAFE」をオープンし飲食業界に参入。翌年、(株)ダイヤモンドディングに社名を変更。二〇〇八年、外食産業に最も影響を与えた人物として外食産業記者会が表彰する「外食アワード二〇〇七」を受賞。二〇一〇年一〇月に、飲食業界初の「100店舗100業態」を達成。外食業界のリーディングカンパニー及び売上一〇〇億円を目指す、通称・銀座のフードファンタジスタ。(株)ダイヤモンドディング代表取締役社長。

現在は大阪府在住だが、香川県出身の私にとって幼い頃より高知県は近い土地だった。家族旅行で県内に数日滞在したこともあるし、高知県出身の友人に街を案内してもらったこともある。香川県からJRに乗り四国山地を越えて高知駅に降り立つ度にいつも、同じ四国なのに瀬戸内海側とは異なる強い陽射しを感じた。

美術の仕事にたずさわるようになり、前職の丸亀市猪熊弦一郎現代美術館勤務時代には、高知県立美術館で開催された展覧会を観るためにいく度か足を運んだし、同館に勤務する知己の学芸員もいる。また赤岡町の絵金や建築でも知られる高知県立

牧野植物園にも行ったこともある。高知県の美術については、例えば一九六〇年代の前衛土佐派といった動向や、高知県出身の写真家石元泰博や東京で作品を見る機会も多い現代美術作家の竹崎和征、大木裕之などは知っているが、一方で、高知県の現在の美術状況については、それほど知識を持っていないのが正直なところであり、若手作家の美術作品の審査依頼を受けた時、どのような作品に出会えるのか楽しみとなった。

顕彰するとともに、丸亀市民の芸術文化の振興をはかることを使命としている。香川県出身の画家、猪熊弦一郎本人から寄贈を受けた約二十万点に及ぶ猪熊作品を所蔵し、そのコレクションを常設展示で紹介するとともに、国内外の現代美術を中心とした年数回の特別展示を開催している。こうした美術館の運営方針もあり、十五年以上にわたる勤務の間に多くの現代美術展を企画、担当した。草間彌生、やなぎみわ、須田悦弘、ヤン・ファープル、ピピロッティ・リスト、エイヤリリーサ・アハティラ、マリーナ・アブラモヴィッチ、マルレーネ・デュマス等々。全ての名前を挙げることはできないが、数多く

の作家の作品を紹介する機会を得た。大阪府の中心地、中之島にある国立国際美術館に移ってからも、現代美術の調査、研究を重ね、展覧会の企画を行っている。

第6回美術作品コンクールにあたっての審査

植松 由佳

この美術作品コンクールは、今回で第六回目になるといふ。平面作品が審査対象であるが、私の専門領域は現代美術である。現代美術とは、現代社会の批評装置であると考えている。こうした考え方から今回の作品審査にあたっては、絵画作品のいわゆる技術の優劣を考慮することよりも、同時代に生きる若い作家たちが私たちの生きる社会をどのように捉えているか、また社会に対してどのような声を発しているかを対象にした。



の考えを知ることができ、大変貴重な時間だった。

コンクール開催の五周年記念として審査前日に榎木野衣氏、三浦末雄氏とともに鼎談を行ったが、最後に設けられた質疑応答の時間の中で、高知県に在住して制作活動が続けることの悩みが問いかげられた。政治も経済もそして美術も、日本においては東京に機能のほとんどが集中している。日本各地にも美術館があり、美大や画廊があり、作家たちが制作を続け、それを見る鑑賞者もいる。しかし残念ながら情報発信は東京が中心で、地方にいれば、将来への暗澹たる見通しに不安を抱くのだろう。とは言え、高度な情報化がはかられ

た現代社会では、様々な方法で国内のみならずグローバルに情報を入手することもできるし、世界各地におもむくことも簡単にできる。考え方を換えれば、歴史ある文化を背景に豊かな自然に抱かれた土地に暮らし制作を続け、東京におもむく一歩はニューヨークへもロンドンへも同じ一歩である。ボーダーを軽々と超越する姿勢を持つて欲しい。

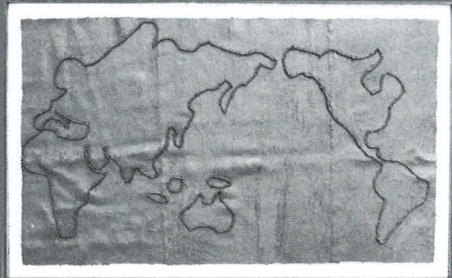
若手作家が応募するコンクールはいくつもあるが、地方でこの種のが開催されるのは珍しいのではないだろうか。地方では県展や市展といった公募展が主流だが、最優秀賞者は個展開催の機会が与えられるということも含めて、若手支援の目的

このコンクールの審査の特徴の一つは、展覧会会場で作品を前に、審査員と応募者が直接会話を交わす公開審査にあるだろう。これまでにも他の審査にたずさわったことがあるが、公開審査はあまりないシステムである。私のような審査対象をとる場合、展示された作品を見るだけで審査するよりも、質疑をかわすことで作家のコンセプトが伝わり、審査判断に役立つものとなる。応募者である若手作家にとっても、公の場所で自らの作品について語ることは有益な経験となるはずだ。作家は作品が仕上がった時点で作品を手放し、鑑賞者による理解を委ねるだけでなく、自らの言葉を持って伝えることも重要だと思う。今回も、作品を見ただけでは分からなかった作り手

～第6回美術作品コンクール受賞作品～



最優秀賞
「おんな」 佐竹龍蔵



優秀賞
「Border line」 多田香織



優秀賞
「移動が私を育てた」 刈谷昌江

うえまつ ゆか
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、財団法人ミモカ美術振興財団勤務を経て、二〇〇八年一〇月より、国立国際美術館主任研究員。「第一三回アジアン・アート・ビエンナーレ・バン格拉デシュ二〇〇八」日本代表コミッショナー。京都造形芸術大学非常勤講師。

からも今後もぜひ継続していただきたい。その姿勢こそが、地方で制作を続ける作家たちへの一番のエールとなるだろう。

イルカと遊べる、室戸ドルフィンセンター

河上 倫子

みなさんイルカと泳いだことがありますか？ なんと、高知の室戸でイルカと泳げるって知っていましたか？ そう、イルカと泳いだりイルカに触ったりできる施設、それが室戸ドルフィンセンターです。なんとセンターは年中無休。今年もお正月から初泳ぎを楽しまれた方もいらっしゃいました。

室戸ドルフィンセンターの歴史

平成十五年、センターは、「イルカと人とのふれあい」とイルカセラピーの研究」を目的に麻布大学と室戸市が連携して室戸でイルカの飼育を始めたことからスタートしました。しかし、平成十七年、相次ぐ台風被害

やイルカの飼育のむずかしさから研究は休止されました。このまま室戸からイルカがいなくなってしまうのはもったいないと、地元有志により「NPO法人室戸ドルフィンプロジェクト」を立ち上げ、平成十八年、「室戸ドルフィンセンター」をオープンしました。

室戸ドルフィンセンターの目的

室戸ドルフィンセンターの目的は、大きく二つあります。

- ① 室戸の地域活性化
イルカとのふれあい体験プログラムを行うことにより、室戸への交流人口が増え、地域がにぎやかになることを目指しています。このために日々のイルカの体調管理や魅力のあるプログラム作り、また楽しいイベントの実施などに力を入れております。
- ② 福祉への社会貢献
主に自閉症の子どもを対象としたイルカセラピーの研究と、イルカ介在プログラムを行っています。現在は、一泊二日で室戸青少年自然の家へ宿泊しドルフィンスイムを二回行うプログラムを不定期で行っています。

イルカセラピーの研究

平成十八年〜二十一年度、高知大学医学部と共同でイルカセラピーの

見てるだけでもとってもかわいく癒されます。そして触ってみると、すべすべなお肌。思わず笑顔になってしまいうイルカたちなのですが、なんととっても、人とコミュニケーションが取れることがイルカの最大のポイントではないでしょうか？

室戸ドルフィンセンターでは、イルカと触れ合うことを目的とした施設なので、ショーを行っているわけではありませんが、毎日トレーニングをしていきます。トレーニングのメニューは、歌を歌ったり、手を振ったり、三回連続ジャンプをしたり、毎日変わります。これは少しでもお客様に楽しんでいただくためでもあります。実はイルカのためでもあります。飼育されているイルカは、野生にいる時と比べ刺激の少ない生活になってしまっています。トレーニングはイルカにとっては勉強の時間であり、運動の時間でもあるのです。新しい種目に挑戦することは、イルカにとって新鮮で楽しいことでもあり、思いっきり体を動かすのはやはり気持ちがいいですね。人の子どもが学校でお勉強するのと同じような感じですね。

イルカも一頭一頭個性があり、性格が違います。トレーニングに対しても、真面目にコツコツ取り組むタイプや、また張り切れば張り切るほど失

敗してしまうイルカもいるようです。それぞれのイルカの個性に合わせて、イルカが飽きたりうんざりしたりしないように、できるだけトレーニングを楽しめるように持っていくのがトレーナーの腕の見せ所だといわれています。これも、学校の先生と同じだと思います。

そうやってイルカとの信頼関係をしっかりと作っていくからこそ、初めてのお客様とも安心して泳いだり遊んだり触ってもらったりできるのだと思います。

また、「トレーナー体験」というプログラムもあり、実際に自分でイルカにサインを出したりエサをあげたりできます。イルカとのコミュニケーションをじっくり体験していただける内容になっています。水に入らなくてもできるので、冬場は特におすすめのプログラムです。

研究を行いました。研究の結果、イルカとのふれあいプログラムに参加した子ども達の、日常生活における大きな行動の変化は見られなかったものの、家庭内におけるストレスを軽減したという結果が出ました。自閉症の子どもをもつ親は、子どもとのコミュニケーションの問題から、精神的に負担の大きい生活を余儀なくされています。育児に対する自責の念や、いつも眼が離せないことからくる生活上のストレスがあり、このため不用意に叱責したり、否定的な感情を表すことにより、子どもに不要な恐怖感を抱かせることがあります。家庭内におけるストレスの軽減は、親の子どもへの接し方が改善され、子どもの発達に良好な影響を与えることが期待できるそうです。研究終了後のアンケート調査において、「子どもの動きが以前と違って見える」「イルカの話など話題が豊富になった」などの感想が得られました。このアンケートは母親が記入したものが多くことから、家族間におけるストレスの減少が母親の子どもに対する見方を変えていることがうかがえます。

イルカ介在プログラムの実施

高知大学医学部との共同研究の成果を生かし、当法人では平成二十一年度

かわかみ みちこ
一九七七年 高知市生まれ
NPO法人室戸ドルフィンプロジェクト職員

室戸ドルフィンセンターのプログラム

	体験時間	料金		
		大人 (中学生以上)	小人 (4歳以上)	3歳以下
ハロードルフィン (見学)	10:00~いつでもできます~16:00	¥420	¥315	
ドルフィンタッチ	10:00 12:00 14:00 16:00	¥735	¥630	¥315
トレーナー *要予約	11:20 13:20 15:20	¥2,100		
スイム *要予約	10:20 12:20 14:20	¥8,400	¥5,250 (小学生)	

*スイムは冬季割引あり。ウエットスーツ等のレンタル料込。
*各体験料には見学科が含まれております。
*タッチの後にはトレーニングの時間があり、ジャンプなども近くで見られます！！

- ハロードルフィン：かわいいイルカを近くで見られます。
- ドルフィンタッチ：イルカに触れます。
- トレーナー体験：イルカに合図を出したり、エサをあげたりします。イルカとじっくり関わることでできるプログラムです。
- ドルフィンスイム：イルカと一緒に泳げます。最後に背びれをもってイルカに引っ張ってもらいます。水着とタオルをご持参ください。

〒781-7101 高知県室戸市室戸岬町鯨浜海の駅とろむ内
TEL/FAX 0887-22-1245
メール：toiawase@muroto-dc.jp
ホームページ：http://www.muroto-dc.jp/
@irukachamaでツイッターもやっています



イルカの魅力

大きくて丸いからだ。つぶらな瞳。

より、自閉症の子どもを対象としたイルカ介在プログラムに取り組んでいます。

自閉症の子どもたちは、新しいことにチャレンジすることが苦手とされています。それは、相手の要望を読み取ったり見通しを持って行動するための想像力が、ほかの人よりも弱いためだと考えられています。

そこでセンターでは、子どもたちに安心して参加してもらえるように、通常のプログラムとは以下の点で進め方を変えています。

- ① 通常6名の定員を2名に絞る。
- ② セラピストや高知大学医学部の学生さんなどのボランティアスタッフがサポートする。
- ③ 視覚的な情報の処理が得意な方が多いので、説明などは写真などを使い視覚支援を行う。
- ④ 切り替えが苦手な子どもも多いので時間をゆったり取る。
- ⑤ イルカと泳ぐ前にウエットスーツや水に慣れるために付近の海で泳ぐ練習を行う。

今後は、いつでも気軽に参加していただけるようにセンターの常設のプログラムとしていくことも検討していきます。

縁の雫

えにし

しずく

岡崎 健児

今こうして筆を執っている机の前の窓からは、目の前の桜並木とその先の堀川を挟んで病院の川に面した窓を見渡す事が出来る。診察室であろうその部屋以外の、恐らくは病室と思しい部屋の窓まどを一望出来る。縦六列、横十一列の計六十六の窓たちだ。同一規格に切り取られたフォトスタンドの様でもあり、大型家電店の薄型液晶テレビの展示スペースの様でもある。最近その部屋へやに掛けられているカーテンが変わったのに気が付いた。変わった、と思うのだが昨今記憶が曖昧になる事が多く断言する程の自信がないのだが、随分と印象が変わるものだ。両のカーテンが一分の隙もなく固く閉じられている窓、片方の窓だけカーテンが

閉じられ一方の窓から蛍光灯の灯りが漏れ、人の息遣いが聞こえてくる気がする窓もある。もちろんカーテンを引いていない窓もある。見舞いに来ているのだろうか、窓辺に普段着姿と思しい二、三人の人達の様子が見受けられる。以前は、窓枠に鳩の餌を与える老婦人の姿を目にした事があった。唯一、外との繋がりを感ずる時間だったのではないか。窓辺に腰掛けじつと外に目を遣っている人がいる。患者さんであろう着衣の上半身が見えている。その目の先に捉えているのは、帰りを待つ家族の「おかえりなさい」の笑顔だろうか、いとしい恋人の笑顔だろうか。突然、「ずっと見ていたんです。病

室の窓から：最初は何のお店かも分からなかったのだけれど、退院する時には寄ってみようと思っていまして」と言う様な嬉しいお話を聞き、手を動かす間ひとしきり会話が弾む。病院を出、再び日常に帰っていかうとする活力が感じられる。恐らくは何気なく窓の外を眺めているうちに少し興味を湧いたのだろう。一杯のコーヒーが明日から始まる生活の、少しの安らぎの時間のお供になればこんな幸せな事はない。僕にとつては日々その傍らにあつて体の一部でもあるかのようなコーヒーだが、その一杯のコーヒーを心待ちに退院の日を迎える人がいる。日々、同じリズムで繰り返される体に染み付いた作業の一つひとつも決して疎かに

は出来ない。その願いを込めたならば、その味わいは更に深いものになるのではあるまいか。
ある朝、おばあちゃんは同じ病室の病院仲間に声を掛けた。「もうまあコーヒー屋の兄さんが来るぞね：ほら来た！」と病室の窓から、僕の小さな店を毎日見守ってくれていたそうだ。「兄さん、朝、西から来て晩には東に向けて帰るが、どうなつちゅうぞね」と尋ねられた。「随分ご心配をお掛けしていたんですね」笑い合つた。笑顔がとても可愛い。見ていたのは僕の方だけではなかったのだ。主治医に美味しいコーヒーをプレゼントしたいと言う。外に出歩く事は禁じられているそうだが、気にする素振りはない。あくまでマ

イペースだ。退院後の通院の際に、店内に僕を見つけると軽く手を上げ一声掛けてくれる。そんなお付き合いの中、店内の椅子に腰掛け一休みしながらお話をさせて頂く機会に恵まれた。おばあちゃんによれば、主治医の奥さんの腹の具合が悪く薬を処方したがすっきりとしないとの話を聞きつけ、秘蔵の梅エキスを主治医夫人にお分けしたところ、おばあちゃん曰く「ケロリ、治った」。以来、主治医から「梅エキスをまた分けてくれんろうか」とのお声が掛かるそう。それなら僕も、しかしそのような貴重なもの頂くわけにはいかない。是非とも、その作り方を伝授しては頂けないだろうか」とお願いしてみた。すると、それは構わんが、今迄そう言つて何人も人が挑戦したが作業は単純なだけに逆にその塩梅（あんばい）が難しいとの事。「あてい（わたし）も来年はよう作らんかもしれんき、兄さんにはこの前の札に作つちやあよ」と言つては頂いたものの、聞けば手間もかかるしなかなかの重労働。「無理しないで下さい」と伝え別れた。そんな約束の記憶も薄れかけたある日、おばあちゃんがやつて来た。「兄さん持っ

て来たぞね」と差し出された小さな容器。「小さなさじを持って来てみいや」言われるままにさじを手渡した。僕の手の中であつた小さな容器を取り上げ、その蓋をクルクルと回し開けた。ふわっと青梅の甘酸っぱい香りが僕を包みこんだ。煮詰められた梅は鉛色の中にも青梅の仄かな緑が残っていた。「一回にこればあ舐めたらえい」おばあちゃんは小さじに掬い取つた梅エキスを僕の方に差し出した。一瞬躊躇う僕に「舐めてみいや」口いっぱいにおばあちゃんの優しさが広がった。以来僕の店の冷蔵庫の片隅に鎮座して、おばあちゃんに代わつて僕を見守つてくれている。
人の縁とは掛け替えないものだ。日々窓の外の風景を眺める。この場所は市中心部にあつても川あり桜並木ありと、四季折々変化にとんだ彩りを見せてくれる。そうした季節の移ろいは道行く人の目を楽しませてくれるだろう。そして僕のような窓枠の住人たちにとつても掛け替えない大切な事なのだ。花鳥風月を楽しむことは、ついでに行けぬと感じつつも必死に時代の流れにしがみつこうとしている自分自身を、一時で

も振り返り見つめ直す時間を与えてくれる。そして病室の窓から見える風景はきつと患者さん達の心の栄養になつていくと願いたい。

夕暮れが迫ってきた。次第に暮れゆく街並みの中、桜もみじがその紅を闇に溶かすまいとその色を濃くしていくなか、今日もまた蛍光灯に淡く浮き出された病室の窓から、家路

を急ぐ止めどない車の列に視線を送り続ける姿があつた。

おかざき けんじ
一九六五年 南国市生まれ
コーヒー店豆蔵店主
第一一二回高新文芸短編小説人選者。



「古池や…」のなぞを読み解く

漢文に、「二重否定」と呼ばれる文型がある。「勉強せざるべからず」といった表現である。

「勉強すべし。」を否定し、その否定を再否定する。すると、「勉強すべきではないことではない。勉強すべし。」の意味にもどりそうなものである。ところが違う。「絶対に勉強すべきだ。」「必ず勉強せよ。」という強い肯定になる。つまりニュアンスの異なる肯定になる。

「結婚せざるべからず。」は「絶対結婚すべきだ。」「離婚せざるべからず。」は「必ず離婚すべきだ。」という意味である。

「否定の否定」が元の「肯定」に戻るのはなく、「質的な変化をもなった肯定」に変わる。

これと似た表現の仕組みを、文学作品の中でよく見かける。否定的な表現をもう一度否定することで、質的飛躍をもった肯定的イメージをつくり出す表現法だ。

その古典的な例が次である。

古池や蛙飛び込む水の音

あまりにも有名な芭蕉の句だが、私見によれば、この句には、「否定の否定の法則」が働いている。

ある時この句を取り上げて、次のような授業を行っていた。

「蛙が池に飛びこむ音は小さい。それが『水の水』という体言止めによって強調されているね。小さな『水の水』が余韻を引いて鮮明に聞こえた。なぜだろう？ あたりが静かだったからだ。深い静寂があたりを領していた。この『静寂』こそ、この作品のテーマだね。」

ここで突然生徒からつっこまれた。「ほんなら『古池や蛙飛びこむ静寂のなか』と言えはええやん！」

うまく答えられなかった。

三十一年近く前のことだ。それまでも覚えていたのは、この句の核心に迫る何かを感じたからだ。

今なら、うまい言葉がある。「ベタな話」というお笑い用語だ。「ベタな話」が「ベタなジョーク」というふう

りでない、素材そのままの」という意味である。

「古池や蛙飛びこむ静寂のなか」と言ってしまうと、この静寂は「ベタな静寂」になってしまう。それを避けるために、あえて「(水の水)音」という逆の表し方をした。音は静寂を破るものだ。けれど、小さな音はつきり聞こえることで、かえって静けさが強調される。結果的に「ひねり」の効いた「奥深い静寂」幽玄な静寂」を表現できる。

こう言えば、生徒の納得を得ることもできそう。しかし「ひねりとは何か」という問題が残るのである。「ひねり」とは「否定の否定」ではないだろうか。

芭蕉の句の見事さは、「ベタな静寂」を「水の水」によって一度否定し、さらにそれを「小さな音が鮮明に聞こえるほど静かだ」と、読み手に一気に再否定させる言葉の強い流れ方にある。その「否定の否定」によって「ベタな静寂」は「幽玄な静寂」に変わる。

「ベタな静寂」↓「否定(水の水の音)」↓「否定(水の水から深い静寂を想像)」↓「幽玄な静寂」

否定の否定が、元のベタな肯定にもどるのではなく、質的な飛躍をもった肯定へと変化する。「否定の否定の法則」である。

昨年の大河ドラマ「龍馬伝」は、大ヒットを飛ばし、空前の龍馬ブームを巻き起こした。その成功の秘密

(の「つ」)は、岩崎弥太郎の「語り」にあった。弥太郎は、一貫して龍馬を否定的に語る。

「龍馬は……あれはあ腹の立つ男はおらんかったがじゃ……わしはあいつが、この世で一番嫌いじゃった。」

ところが弥太郎が否定すればするほど、その否定を再否定して肯定的龍馬像が立ち上がってくる。……というふうにはドラマが仕掛けられていた。一方、「龍馬空港」というネーミングにはベタな響きがある。ひねりがない。

対して、「坊っちゃんスタジアム」には、キリッとした快い響きがある。それは坊っちゃんや松山という町を罵倒しつくしているからではないだろうか。松山を「不浄の地」とまで言っている坊っちゃんを、地域起しのマスコットキャラクターとして大きく肯定したことが、結果的に「否定の否定」ひねり」となっている。

芭蕉の句の法則は今も生きているのである。

ひろい まもる

一九五四年 高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。中一から高三まで六年連続で学級担任を続けること、五週目に入っている。現在高校一年生の担任で、国語を教えている。

ミュージックストリーム2010

2010年12月23日(木・祝)にかるぽーと大ホールにて「ミュージックストリーム2010」が開催されました。この催しは、高知や四国を代表して全国大会に出場する等、輝かしい成績をおさめた音楽団体に出演していただき、全国レベルの演奏をお楽しみいただきたいという思いで、高知市文化振興事業団が2004年から毎年開催しております。7年目を迎えます今回は、土佐市立高岡中学校吹奏楽部、土佐女子中学高等学校コーラス部、高知西高等学校吹奏楽部の3団体が完成度の高い演奏を披露しました。



各団体が演奏した後、全出演者約160名による合同演奏「Xmassimo!」を披露。舞台をいっぱいに使った迫力ある演奏で、自然とアンコールの声が湧き起りました。そこで、急遽予定していなかった「きよしこの夜」を披露。クリスマスモードに包まれて、アンケート結果も概ね好評でした。

(入場者数630名。アンケート集計数247
〈大変良かった207・良かった25・普通15〉)

お知らせ 投稿者(執筆者)大募集!!

文化・芸術に関すること高知に関すること何でもOK!
あなたの想いを本誌に掲載してみませんか?
掲載希望者は、下記までご投稿ください。あなたの想いをお待ちしております。
※内容により掲載いたしかねる場合もございます。ご了承ください。

<詳細>

文字数1,000~2,500字程度の文章で、PC・手書き、縦書き・横書き問わず。
投稿希望者は、①郵便番号②住所③氏名(ふりがな)④年齢⑤性別⑥職業⑦電話番号をご記入のうえ、下記宛先までメールもしくは郵送にてお送りください。
誌面に使用したい画像等もありましたら一緒にお送りください。
※原稿はお返しできません。掲載の際は、規定の原稿料をお支払いします。

<お問い合わせ・お申し込み先>

〒780-8529 高知市九反田2-1 (財)高知市文化振興事業団「文化高知」係
TEL: 088-883-5071 FAX: 088-883-5069 E-mail: kikaku@kfca.jp

今年<2011年(平成23年)>は表紙のデザインを一新してみました。
国際デザイン・ビューティカレッジの学生さんによる斬新なデザインで、毎号季節にちなんだ表紙を飾っていただく予定になっております。ご期待ください。

第63回高知市文化祭開幕行事

by the Mandolin Orchestra
OPERA SHIMANTO

マンドリン
オーケストラによる

オペラ 四万十

美しい音色でおくる
愛と清流の物語

平成23年4月17日(日)

開場 13:30 開演 14:00

会場 高知市文化プラザ
かるぽーと 大ホール

チケット ¥2,500(前売り・当日とも)

演出:大島 尚志

脚本:清淵 和久 作曲:岩本 圭司
演奏:高知マンドリン土曜日会 指揮:井上 聖香

出演:良 吉 所谷 直生(テノール)
おみね 梅原 ゆかり(ソプラノ)
庄 治 山本 幸雄(バリトン)
エンコウ大王 坪内 一郎(バリトン)

合唱:オペラ四万十合唱団・窪川コーラス

お問い合わせ:(財)高知市文化振興事業団 TEL.088-883-5071

主催:高知市文化祭執行委員会・高知市文化協会・高知マンドリン土曜日会

共催:「オペラ四万十」をまもる会

主管:(財)高知市文化振興事業団・高知市教育委員会

後援:高知新聞社・RKC高知放送・NHK高知放送局・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ

チケット販売所:高知市文化プラザかるぽーとミュージアムショップ・

高知県立美術館ミュージアムショップ・高新プレイガイド・高知大丸プレイガイド
「オペラ四万十」をまもる会事務局 TEL.0880-22-4171(牧野)

高知市文化プラザ
かるぽーと